



# 長崎学レポート

2025年度 第4回公開講座 2025年12月20日・第5回公開講座 2026年1月17日

第21号

2026年5月1日発行  
長崎学レポート  
編集委員会

〒850-0861  
長崎市江戸町5-8  
第5一ノ瀬中央橋ビル

## 第四回長崎学公開講座 第一部発表要旨

### 長崎の新聞

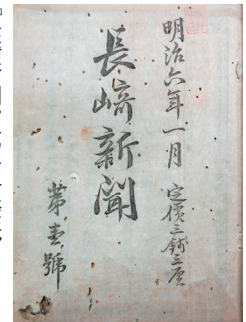
野田 和弘

#### はじめに

明治になると日本でも近代的な新聞が多く発刊されるようになった。それが可能になったのは、本木昌造がこの長崎で、日本文字の金属活字の開発に成功したからでもある。そのこともあり長崎では新聞が早い時期から多数発刊された。この稿では長崎での初期の新聞について述べてみたい。

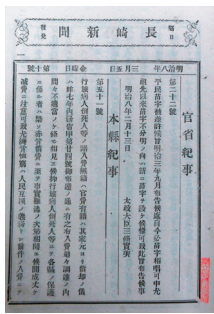
#### 一、本木昌造の新聞発行

明治元年（一八六八）本木昌造は『崎陽雑報』を発行した。これは長崎で刊行された最初の日本語新聞で、日本国内でも早い時期に発行された新聞であった。しかし刊行は不定期で、体裁は二つ折りにした和紙を一〇枚ほど綴った冊子型で、現在の新聞という形からは大きくかけ離れていた。同紙は明治二年までの刊行が確認されている。  
明治六年（一八七三）昌



『長崎新聞』第一号表紙  
発行・新塾活版局

造は西道仙や松田源五郎らと共に『長崎新聞』を発行した。体裁こそまだ和紙二つ折りの冊子型であったが、金属活字を使用した週刊で八ページであった。内容は市中の出来事や広告の他に、ロンドンの大震災などの海外情報や干し鮑、干し海鼠などの上海取引相場など多岐にわたり掲載されていた。しかし同年末に廃刊となった。



復刊された『長崎新聞』  
（明治八年三月五日の記事）

明治八年（一八七五）西道仙は、市内で教科書を販売していた本山実と共に『長崎新聞』を復刊させた。隔日刊で、四六判の

西洋紙を使った八ページの冊子型であった。内容は政府の官報、県からの通達、雑報、広告、投書などであった。

同紙は翌九年『西海新聞』と改題したが、同年道仙は同紙を離れ、自ら『長崎自由新聞』を創刊した。かねてより西郷隆盛に心酔していた道仙は、折から勃発していた西南戦争の記事を盛んに掲載したが、戦争の終結とともに廃刊とした。



『西海新聞』（明治二年一月一日号）  
発行・長崎以文会社

その後『西海新聞』は明治一五年（一八八一）『鎮西日報』と改題し、保守系の新聞として明治末まで刊行を続けた。

#### 二、『長崎新報』の発刊

明治二二年（一八八九）大日本帝国憲法が公布され、翌年に第一回衆議院議員総選挙が行われるこ

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています



ととなり、長崎市でも市民の政治への関心は高まっていた。しかしこの当時長崎で発刊されていた日刊紙は、保守系の『鎮西日報』のみであった。

これに対し市会議長の家永芳彦らが中心となり、自由民権を唱え野党的な立場からの主張を訴える新聞として、同年九月『長崎新報』が創刊された。

初代社長は家永芳彦が就任した。なお同紙が現在の『長崎新聞』の起源となる。家永芳彦は現佐賀市に生まれ、長崎における弁護士第一号となった人物で、長崎の政界で活躍した。

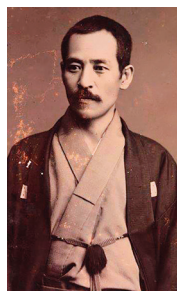
その後『長崎新報』は、保守系の『鎮西日報』と紙面上で激しい論戦を繰り広げた。

明治四三年(一九一〇)『鎮西日報』は廃刊となったが、同年『長崎新報』も皇室に対する不敬の内容があったため、廃刊に追い込まれた。しかし翌年『長崎日日新聞』と改題し復刊を果たした。

以降大正、昭和、戦後と発刊を続け、昭和三四年(一九五九)に『長崎民友新聞』と合併し、『長崎新聞』と改題して現在に至る。

### 三、『東洋日の出新聞』の発刊

鈴木天眼(本名鈴木力)は慶応三年(一八六七)福島二本松藩(現福島県二本松市)で藩士の子として生まれた。一三歳の時上京し会津出身の日下義雄の書生となる。文才があり若いころから機関紙や新聞の主筆を務めていた。



鈴木天眼

長崎歴史文化博物館収蔵

天眼は明治二十一年(一八八八)から二年間、当時長崎県知事に就任していた日下義雄を頼って、病氣療養のため長崎に滞在した。いったん帰京したが自ら新聞を発行するために再度長崎に来た。

まず明治三二年(一八九九)市中の出资者と共同で『九州日の出新聞』を創刊したが、二年後同紙を去り明治三五年(一九〇二)単独で『東洋日の出新聞』を創刊した。

天眼は、長崎から東京、世界を見通す新聞という編集方針を掲げ、積極的

に中央の記事を掲載し、鋭い論評を加えた。これらの内容に読者は新鮮な印象を持ち、県内で独自の地位を築いた。同時に地域で歓迎される新聞も目指し、地域に根付いた紙面づくりにも努めた。また瓊浦游泳協会(現長崎游泳協会)の設立など青少年向けの新聞社事業にも積極的に取り組んだ。同紙には会津の西郷四郎や福島熊次郎、丹羽翰山らが参加し、編集者、記者として活躍した。

同紙で特筆される事は辛亥革命の報道であろう。天眼は早くから孫文ら革命家を取材していたが、明治四四年(一九一〇)孫文が指導する辛亥革命が勃発すると、西郷を中国に派遣し、革命軍の主張や行動を積極的に紙面に掲載して読者に伝え、孫文らを側面から支えた。

天眼は大正一五年(一九二六)五九歳で病没したが、天眼の死後、金子克之が社長となり同紙の発行を続けたが、昭和九年(一九三四)ついに廃刊となった。

参考文献 高橋信雄『東洋日の出新聞 鈴木天眼』長崎新聞社二〇一九年

## 第五回長崎学公開講座 第一部発表要旨

### 傘鉾の成り立ち

大田 由紀

#### はじめに

傘鉾(笠鉾)は全国の祭礼や盆行事にみられるが、長崎くんち(以後くんちと記述)では踊町の町印として発展した。当初はシンプルな出し(飾り)と短い垂れで軽々と担ぎ上げていたが、江戸後期には各町が競うように趣向を凝らし、贅を尽くして美術工芸品としての価値を高めた。ついには一人持ちの傘の形状を残したまま、最大級の大きさとなった。



初期の長崎くんちの傘鉾※

くんちは毎回凝った趣向で人々を驚かせたり唸らせるという風流の精神が生きてきた祭りである。それを象徴しているのが傘鉾であろう。また、傘



現在の傘鉾  
(新大工町令和七年)

鉾持ちが傘鉾を回したりする演技(パフォーマンス)を見せるのは長崎だけである。作り物と行為における風流の一体化が長崎の傘鉾の特長である。

#### 一、傘鉾の起源

傘鉾の起源は京都市今宮神社などで毎年桜花の時期に行われる「やすらい祭り」といわれる。疫病を流行させる疫神を鎮め送るために行われ、平安時代から続いている。



京都今宮神社やすらい祭り、傘鉾の一行

花を飾った長柄の風流

傘を押し立て、赤熊(しゃぐま)を被った者たちが鉦や太鼓を打ち鳴らし、舞い踊りながら町を練り歩いて傘に疫神を依りつかせる。疫神を疫神社に閉じ込め、災厄から逃れようとしたもので、傘鉦は神が依りつく目印であった。また、道中では町の人々が傘の下に入り、厄除けをする姿も見られる。傘鉦とそれを囃し踊る者たちの集団は「風流拍子物(ふりゆうはやしもの)」と称された。

二、京都祇園祭の傘鉦 傘鉦などの造り物は次第に豪華で大型になっていく。京都祇園祭の山鉦は傘鉦とそれを囃し踊る者たちが一体となり、車付きの出し物となったものである。現在も疫神が依りついた鉦は巡行後町に戻り次第、ただちに解体され蔵に納められる。現在三四基ある祇園祭の山鉦のなかで、「綾傘鉦」と「四条傘鉦」が傘鉦の代表を残している。四条傘鉦の巡行では赤熊を被り、太鼓を打ち鳴らし、棒振りが舞い踊り、風流拍子物の要素を現代に伝えている。



四条傘鉦と棒振り囃子

傘鉦が本来持っていた神霊を送るという意味合いは、全国的にも一部の祭礼を除いて見えにくくなったり、すでに忘れられたりした祭りも多い。県内では、平戸市生月町の館浦盆踊りの傘鉦は、下をくぐると病気になるといういわれ、依代的な要素が認められる。

三、くんちにおける傘鉦 京都祇園祭は一五世紀に山鉦の形態がほぼ固定化され、戦国大名によって各地に移入された。くんちが始まったときから寛永十一年(一六三四年)江戸期の長崎の町は石段が多く、そのため傘鉦は山や鉦に姿

を変えることがなく、一人持ちの形状を残したまま発展したのではないかと考えられる。ところで元禄時代のくんちを描いたとされる「諏訪祭礼図屏風」には、傘鉦の傍らで笛や太鼓を演奏する人々の中に赤熊を被り、太鼓を持った三人の人物が描かれているのが確認できる。他都市の風流拍子物の例では、太鼓を持つ人がこの囃子方グループのリーダーである例が多いという。



くんちでの風流拍子物※

絵画の描写に関して真偽の判断は難しいが、長崎でも風流拍子物が行われていた可能性がある。風流拍子物は「囃すもの」と「囃されるもの」で成り立つが、長崎ではそれが傘鉦とシャギリの関係といえる。

くんちでは傘鉦は各踊町の行列の先頭を行き、それに続いて出し物の一

行、そして最後にシャギリが続く。一見分かりにくいシャギリは傘鉦を囃すもので、元は風流拍子物の要素があったのではないかと思わせる。

また長崎の傘鉦の内部には「鈴(りん)」が吊下げられている。京都祇園祭の山にも鈴が吊下げられ、八代妙見祭の傘鉦や博多松囃子の福神の傘鉦にも見られる。鈴については「厄神を鎮め送る依代で笠鉦に下げられた鈴は鎮魂の呪具であった」(八代市立博物館「大傘鉦展」図録・二〇一七)と考えられており、くんちの傘鉦にも町印というだけではなく、依代として町を浄化するという要素があったのかもしれない。神霊の依り付く造り物は、その度ごとに新作され、終われば破却されねばならなかったとされ、それがくんちの傘鉦の風流化につながったともいえる。くんちの傘鉦の依代についての考察はその伝播と合わせ、今後の課題である。

※印「諏訪祭礼図屏風」長崎歴史文化博物館収蔵  
参考文献「山・鉦・屋台の祭り 研究辞典」思文閣出版二〇二一

## 第四回長崎学公開講座 第二部発表要旨

行商の風景  
江戸から昭和まで

下妻みどり

貿易都市として開かれた長崎は、まとまった田畑もなく、住民の食糧を自給することはできなかった。野菜や魚介類は周辺町村部の行商人が売り歩いてきたようであり、江戸時代後期の地役人野口文龍による『長崎歳時記』には、たびたび彼らが登場する。とりわけ大晦日には、魚や野菜、果物などに加え、しめ縄や餅の台など正月用品の「売声大いに喧(かまびす)し」とあり、町はいつもにも増して賑わったようだ。この様子は、野口と同時代人の川原慶賀による「歳



川原慶賀筆「歳市・行商」  
ライデン世界博物館所蔵

市・行商」と重なる部分も多く、文と絵をあわせて見れば、当時の生活が生き生きと浮かび上がってくる。

『長崎歳時記』には、正月二日のナマコ、正月七日の七草、四月七日の花祭りの飾り用のツツジ、六月末の夏越団子、二月一日の川渡りの餅といった、季節の縁起物の商売についての記述も見られる。正月二日のナマコ売りは「小商人ともは商ひ初めとて大人小児にかぎらず曉にかけて海鼠を売りあり」として、普段は野菜や日用品などを扱う行商人も、この朝だけは全員がナマコを売ったようだ。ナマコは「此朝の鱈(なます)に加ふ」とあり、食文化の一端もうかがえる。

明治に入っても食糧供給事情はさほど変わらなかったのか、明治三七年(一九〇四)生まれの作家佐多稲子『私の長崎地図』には「魚の籠をかついだおばさんが毎朝売りに来る」とある。明治生まれの人々の話を多く収録した『長崎手帖』や、大正元年(一九一三)生まれの永島正一『続・長崎ものし

り手帳』には、様々な行商人やそれぞれの「フレ声」について記されている。中でも「椎の実売り」の幼い兄弟の姿は、前記のほかにも複数人が記しており、寒空に響く「あつたかしいやーい」の声とともに、当時の人々に強い印象を残したようだ。



小島の道をゆく茂木の行商人  
撮影・真木満  
『長崎手帖』一五号

「売り手」の多くは、西山、茂木、浦上など近郊の「生産者」で、浦上の人々の中には、潜伏キリシタンやその子孫もいた。日々の売り上げは、時に浦上天主堂のレンガとなり、浦上四番崩れの歴史を語り継ぐ寄り合いのお菓子となった。食糧や日用品の売り買いは、歴史の表舞台にこそ現れないが、生活の根底にあって時代を映し、ひいては歴史の土台を支えてきたのではないだろうか。

## 第五回長崎学公開講座 第二部発表要旨 アビラ・ヒロンで たどる長崎の教会

福沢 道夫

一、アビラ・ヒロン  
スペインの貿易商とされるアビラ・ヒロンは、一五九四年にスペインの植民地であったフィリピンのマニラから日本に移住し、一六一九年まで長崎に居住したと考えられる。その間、交友のあった宣教師からの伝聞や自身の体験をもとに、当時の日本の状況や歴史を伝える見聞記『日本王国記』を著した。これはカトリックの宣教師ではない一般人が記した数少ない記録である。原本は残っていないが、その写本が残っており、一八八三年に初めてスペインで第一章までが出版された。日本では一九六五年に『大航海時代叢書』(岩波書店)として刊行された。

二、布教期の教会の記録  
布教期の長崎の教会を記す国内の資料は、禁教令の影響から極めて少ない。初出と考えられるのは『長崎縁起略』で、一一の教会を挙げている。禁教後一〇〇年ほど経っており、教会名も所在地もその多くが曖昧になっていた。その後記された地誌類は、内容に若干の差異こそあるが、これを底本としている。昭和以降、古賀十二郎は『長崎志正編附考』(一九二八)に、テイエゴ・パチエゴは『長崎の教会』、『長崎談叢』第五十八輯(一九七五)に、片岡弥吉は『日本キリシタン殉教史』(一九七九)で、同様に一一の長崎の教会を論じている。海外の宣教師の記録が公開されるにつれ、教会名や所在地が明らかになってきたが、サン・ペドロ教会のみ所在地が不明で、地誌にある今町(現金屋町付近)が通説になっている。

三、『日本王国記』の再評価  
第一八章第四節に慶長一九年(一六一四)の禁教令に対して、長崎のキリシタンが抗議活動として



寛永長崎港図(部分)  
長崎歴史文化博物館収蔵

行ったその年五月の聖行列の様子が記されている。特に二〇日の聖行列は、当人が参加したと考えられるほど、歩いた道筋が克明に記されており、分知町に入り外浦町に抜ける地に、サン・ペドロ教会とその広場があるとしている。(図の○印付近) これまで、宗教者ではないアビラ・ヒロンが記した『日本王国記』の評価は低かったが、その内容を根拠に山崎信二は『長崎キリシタン史』(附考キリスト教会の瓦)(二〇一五)で、サン・ペドロ教会の地は分知町辺りと推論した。

今町とした長崎の地誌類は、教会の記憶が薄れた頃の伝承で書かれている。一方、アビラ・ヒロンは、自身が見聞した事を記しており、内容の信頼性は高いと考える。